

敦煌本「大雲經疏」の研究

滋野井 恬

一 ここに「大雲經疏」と表現したが、この呼称は、このものに対する正式名称か否かはわからないのである。現物は敦煌の石窟から出たところの古籍、スタイン本のS六五〇二号で、首尾を欠き、同類のものは現存藏經の何れの版にも収められておらず、その正式名称が知られないのである。ただ、中国の学者がこの名で呼んでいるので、ひとまず、それに従つて「大雲經疏」の名を用いたのである。

もつとも、これと同類のものが他に一点敦煌から出ており（S二六五八号）、已に矢吹博士によつて「武后登極讖疏」なる名のもとに研究が行なわれている。しかし、S二六五八号とても首尾欠で、「武后登極讖疏」というのも、矢吹博士が仮につけられた名である。

本点の内容から見れば、六朝時代に北涼の曇無讖が訳出した「大方等無想經」つまり、一般に「大雲經」と呼ばれるところの經典の、大正藏經本で言えば卷四・卷六の両巻の中から抄出した文について説明を施したものであつて、こうし

た面から見て、「大雲經疏」という名称も不適當なものではない。また、そこに見られる説明は、女主君臨の説をもつて、唐朝第三代の天子高宗皇帝の皇后いわゆる則天武后が皇帝の地位に即くことを弁護したものであつて、こうした点から言うならば、矢吹博士の命名も、あながち不當なものではない。ところで、スタイン本中に二点存在するとは言うものの、そのうちS六五〇二号の方が、他の一本よりも内容的に優れているので、それに基づいて論を進める次第である。

S六五〇二号は、前述の如く首尾を欠いているが、現在、一四紙、三七五行が存している。一行はおゝむね一七字詰めであり、中には有名な則天文字が用いられている。

当写本は、便宜上、およそ三部に分けることができる。第一部はS二六五八号に先立つ部分で、第二部はS二六五八号と重複する部分、第三部はS二六五八号に続く部分である。

第一部は首部欠損の為意味の取り難い部分も有るが、およそ、この疏に引かれた「大雲經」は三七韃度より成ること、

及び、何故大雲と名づけるか、という経名の由来を述べ、次いで、「大雲經」四・六から淨光天女に関する部分を適当に拾い上げて、淨光天女の過去及び未来のことを説き明かすということになつていて、第二・第三部へと続く。第二・第三部は、いずれも、第一部に記された經文等についていると注解するのであるが、その中で、淨光天女は仏滅後一七〇〇年の時に於いて女身をもつて中国に君臨するということになつており、則天武后こそ淨光天女の後身である、と、武后が中華の天子の地位に即くことが、仏陀の懸記にかなつたことである、とするのである。しかも、そのことは道教の教えの中にも予言されており、更に、古く、周の文王の予見する所であつた、と迄述べているのである。そうしたこともとの若干を述べるに、次の如くである。

「大雲經」に淨光天女が未来世において、女身をもつて国土に王となる、という意味の文章が有るが、これに対して「証明因縁讖疏」の「弥勒世尊出世時、療除諸穢惡云々」と有ることを持ち出して、次のように述べている。

按弥勒者 神皇也、弥勒者梵語也、此翻云慈氏、按維摩經云、慈悲心為女 神皇当応其義合矣

すなわち、弥勒とは神皇（則天武后）を意味するものである。何となれば、弥勒とは中国では慈氏と言いが、「維摩經」に依れば、慈悲心は女性を意味するものであり、それは、女

性であるところの武后を意味するものである、と附会を加えるのである。当時広く行なわれていた弥勒信仰を巧みに利用したものであるが、その当時に於いて已に学僧の間では偽經と目されていた「普賢菩薩說証明經」を持ち出すあたり、甚だもつて厚顔の沙汰とせねばなるまい。

また、紫微夫人の「玉□天成緯」に
太上還玉京界乱妖魔行地上成血泥、衆生無願生、会得承唐年、中国息刀兵、李子五六後、止戈昇太平

とあるのを持ち出して、これは

時に名君無く、隋代末期に、上は人々を虐げ、戦争が多く、人々は苦しみ、生を願う者は無かつた。しかるに、唐になつて中国国内が平和になり、国初以来今や七〇年（五六の次には七がくる。それを国初以来七〇年の七に結びつけたものであらう）、武后（武

という字を分解すると、止と戈となる。ここから止戈をもつて武氏—武后を意味するものとするのである）の盛運太平なるに遭遇したことを予言せるものである。

としている。

また、西岳の道士の得た仙人の石記に

止戈天昇中鎮和氣得受万億年

とあるのに対していちおうの解説を施した後、

謹按泰卦、坤上而乾下、則是天地交而万物通、上下交而其志同也、内陽而外陰、内健而外順、内君子而外小人、君子道長、小人

道消、象曰天地交泰、后以財成、而地之道輔相天地之宜、則明
神皇処坤位而君臨於上、皇帝居乾位爲子於下也、即明文王預知
聖運、故演此卦、欲明今日天下交泰之応也

と称し、武后が坤位に在つて上に君臨し、皇帝が乾位に在つて子として下に居る、という現状は、周の文王が、前もつて、こうなることを知つていて、この卦を演出したのであつて、今日の状況は文王の予見に合致するものである、とこじつけているのである。

そも、永隆二年(六八三)一二月に高宗が崩するや、高宗と武后との間に生まれた李顕が即位した。この人が中宗である。しかし、実権は母の武太后が握つており、中宗は即位後数十日にして、ちよつとした失言を理由に武后によつて廢位され、代つて、中宗の弟の李旦が二四歳で皇帝となつた。

この天子が睿宗である。しかし、実権はやはり母の武后が握つていた。こうした動きの中で武后の一族が重く用いられるのは当然のことであり、武后の非を責める声が強くなるのも自然の勢であつた。反武后派の一人に李敬業がいて、六八四年八月に楊州で兵を起こしているが、有名な「一坏之土末乾、六尺之孤安在」の言葉は、この時に賈賓王が認めた檄文の一節である。この反乱は一カ月くらいで鎮定されたが、この反乱に際して内史裴炎が、

皇帝年長、未俾親政、乃致猜豎有詞、若太后返政、則此賊不討而

降矣

と直言して武后の激怒を買つてゐるという例が有る。成人した皇帝が在り乍ら、母の皇太后が政を執つてゐるといふのは、たしかに異状である。武后及びその一派としては、何とかしてこれを弁護する必要が有つたのである。坤上乾下の卦は、又と無い好き口実となつたことであらう。しかも、これが、周の文王の定むる所のものであつたといふことであるから、まことにもつて都合が好いわけである。

このようにして牽強附会の弁をもつて、女性の武氏が登極することが聖賢の予見する所であつた、と、武后が皇帝の位に即くことの正当化に大童となつてゐるのが経疏の内容なのである。

二 中国史上、王朝交替の例は少なくない。李姓の唐に対して、武姓がとつて代ることは、まだ人々の了解を得ることができよう。しかし、武姓ではあつても、高宗の皇后であつたとしても、女性の身をもつて中国に君臨することは、中国の伝統が許さないのである。武后は、中国史上稀に見る女傑であり、その政治的手腕は高く評価してよく、当時、彼女の勢力は絶大なるものが有つた。しかし、現実においていかに実力が有ろうとも、女主君臨は天下の常識の認める所ではない。このことについて、旧唐書三七五行志に

則天時、新豊東東南露台鄉、因大風雨電震、有山踊出、高二百

尺、有池周三頃、池中有竜鳳之形、禾麦之異、則天以為休徵、名為慶山、荊州人僉文俊、詣闕上書曰、臣聞天氣不和而寒暑隔、人氣不和而疣贅生、地氣不和而堆阜出、今陛下以女主居陽位、反易剛柔、故地氣隔、其山變為災、陛下以為慶山、臣以為非慶也、誠宜側身脩德、以答天譴、不然、恐災禍至、則天怒、流于嶺南

と有る。すなわち、新豊県に新山が湧出した時、武后は奇瑞として慶こんだが、僉文俊なる人物が、天地の気の正常さが失なわれた時に異変が起きる。今、陛下は女身をもつて陽位に処るというように天地の理法に背いたことをして居られるから、山が湧出する、という異変が生じたのであります、と直言して武后の激怒を買つたというのである。

「旧唐書」三八地理志等によると、この地変は垂拱二年（六八六）のことであつたと知られる。武后の臨馭を否定する空気がなおも強く、しかも、その理由が、女性君臨は天地の理法に背くものである、とするのである。武后としては痛い所を衝かれたわけであつた。中国の伝統に背いて迄も中華に君臨しようとするには、女主君臨を正當づけるのが是非とも必要であり、最大急務の一つであつたのである。ここにおいて、先ず「大雲經」の女主君臨の文が最大限に利用されたのであり、後には「宝雨經」の中に迄それが組み込まれることとなるのである。六九〇年（載初元年）七月に「大雲經（疏？）」が上進され、九月壬午に武后が皇帝と称し、国号が唐から周

と改ためられ（武周革命）、天授と改元、十月壬申に天下に大雲寺を置くことが詔され、こうしたことと并行して天下の寺に於いて「大雲經」を講せしめたこと、しかも「大雲經」については、万歳通天元年（六九六）訳出の「華嚴經」に対する武后の序文中に「朕襄劫植因、叨承仏記、金仙降旨、大雲之偈先彰云云」とあることや、天授二年に「仏教が革命に貢献したので、仏教をもつて道教の上に位せしめる」という詔において「大雲經が王国の禎符を明らかにした」と言つてゐることなどに注意すべきであろう。

この經疏が作られたのは、その記述から六九〇年と知られ、又、撰者については、武后の内道場に奉仕した懷義を筆頭とする人々であつたと見るのが一般であつて、このことに異存は無いが、ただ、この經疏がすべてで幾巻あつたものか、正式には何という名称であつたかということも問題となる。以下、そうしたことどもについて考察を加えることとする。

三 「大雲經」は版によつて巻数が異なるが、大正藏經本では六巻から成つており、本疏は、六巻本をもととして言え、第四・六巻の中から、淨光天女とその過去・未來のことを述べる部分を適当に取り上げた所を中核に、女性が中国に君臨することが仏陀の懸記にかなうものであるということをお宣伝するのに都合のよい部分について布演した所のものであ

る。他の部分、ことに巻一から巻三の部分ほどのように扱われたかというに、全く（或は殆んど）採り上げられなかつたのではないかと判断される。何故かと云うに、先にも述べた如く、敦煌本の初めの方に於いて、この疏が依つた所の「大雲經」が三七韃度より成つてゐるとか、「大雲經」の名が異なる所からつけられたかといふことを述べてゐる所から、そう考えられるのである。もし、第一—三卷等が取り上げられていたものであるならば、それは当然、より以前に採り上げられるべきであつて、第四卷から登場する淨光天女に関する部分に於いて漸く「大雲經」は三七韃度より成るとか、大雲の名の由来について述べる理由は無いわけである。最終的に言うならば、「大雲經」の中から淨光天女関係のこと及び武後の登極に都合のよい部分のみを取り上げて注解を施したものがこの経疏であつたと思われ。そうすると、敦煌本の説の進め方から推して、出土本は首尾を欠いてゐるとは云うものの、「大雲經」からの淨光天女に関する引文に対する注解—別の表現をすれば、武后登極に対する弁護—は、あといくばくも無いと考えられるのである。しこうして、現存の部分が一四紙三七五行であるということは、分量的に見て、鳩摩羅什訳「金剛般若經」より多く、「觀無量壽經」よりは少ないといふやうなことであつて、一卷本として調卷するに手頃なものと考えられるのである。よつて、本疏は全体として

一四紙をあまり越えることなく、一部一卷十数紙程度の分量のものであつた可能性が強いのである。

さて、右のように見てくると、ここに一つ注意すべき書が浮かんでゐるのである。己に牧田諦亮博士が指摘されたことであるが、「東域伝灯目錄」上に『大雲經神皇授記義疏一卷』なるものが見られる。「東域伝灯目錄」は一〇九四年に著わされた書である。「東域伝灯目錄」に於いては右一卷本についての注記は全く見られないので、その内容は判然としないが、題名から推すに、「大雲經」に基づいて、神皇が仏の記前を受けることを記したものと察せられる。このような内容と推測されること、及び分量が一卷であるということから、「東域伝灯目錄」に見える書と、上来述べて来た所の「大雲經疏」とも「武后登極讞疏」とも仮称される敦煌本とは、同一のものと考えられるのである。

武周時代は七〇五年の中宗の復位をもつて終り、やがて玄宗の開元の盛世へと次第する。この間、日本と中国との交渉は続き、遣唐使の往来も数回を数え、入唐僧や来日漢人僧も少なくはなかつた。こうした日唐交渉の動きの中において、武周時代に、或いはその後において、少なくとも武周革命の当初に在つては中国に広く行なわれたところの武后登極を弁護する書が、日本人の手に入り、日本へ将来されることは大いに有り得ることである。

鄙見を述べるならば、S六五〇二号の「大雲經疏」とは、「大雲經神皇授記義疏」と同じものであり、「大雲經」全体の注釈書ではなく、武后の纂奪に都合のよい部分のみを注釈したものであつて、その裏に、武后一派の弱みが秘められたものと考えるのである。

- 1 王重民、敦煌古籍叙録。王国維、觀堂集林一七（但し、觀堂集林ではS六五〇二号であることを明記していないが、解説内容から、本点と解される）。ほかに、商務印書館発行の敦煌遺書總目索引では大雲經としてゐる。
- 2 三階教之研究、第三部附篇二。
- 3 普賢菩薩說証明經なるものが敦煌石室から出てゐる。隋の法經の衆經目錄二の衆經偽妄の部に名を載せており、以後の經録にても偽經扱いされ乍らもその名が見られる。内容は普賢菩薩の威神力、四維上下の九仏、過去七仏の功德を説くもので、弥勒信仰とも大いに關係をもつものである。この經に基づいて作られたのが証明因縁識疏である。
- 4 大正藏經八五の普賢菩薩說証明經に、これに相当する文章が見えてゐる。
- 5 代李敬業討武氏檄（全唐文一九九）。
- 6 旧唐書八七裴炎伝。
- 7 拙稿、宝雨經をめぐる若干の考察（印度学仏教学研究二〇一）。
- 8 唐大詔令集一一三釈教在道法之上制。
- 9 同博士、中国仏教における偽經研究（東方学報 京都 三五）。

寄稿されなかつた諸氏の發表題目（七）

中国仏教にみる神異 pratihāraと apoha 仏教とキリスト教に於ける罪の意識に ついて	鞍馬をめぐる勸進活動 金光明最勝王經と華嚴經との関連にお ける上天思想について 阿毘達磨仏教の学派批判 善導の觀念法門における凡夫觀 凝然の一乘思想 元朝の宣政院使 カトマンドウの Sukhavativyūha 写本に ついて	大乘起信論解釈への一考察—裂網疏を 中心として— 古ウパニシャッドにおける Avidya につ いて 金剛經五家解の傳大士頌 曹洞教団の成立について P'ithu	藤谷 顕 前田 專学 増田 任雄 松田 文雄 松濤 誠達	服部 克彦 服部 正明 花山 勝友 浜田 全真 平岡 定海 広瀬 智一 深貝 慈孝 福原 隆善 藤島 建樹 藤田 宏達
---	---	---	--	--

(三五四頁(二七))